

には、サッカーといえばトトカルチョ、トトカルチョといえばマフィア、そしてマフィアに対する闘いが絡んでおり、決して借金だけの問題ではないというのが一般的な見解のようである。

シチリアはイタリアのなかでも経済的に低開発地域

に属している。しかし、このシチリアに農業労働者として多くチュニジアからの季節労働者が入り込んでいる。このような経済的格差が生み出す労働力移動の国際的連環は、国際的観光客の流れのベクトルとは逆の方向を示している。関心を持ち続けているテーマである。

地誌学情報システム

久保幸夫

今、地理学のための研究システムを作ろうとしている。これは、地域に関するさまざまな形態の情報をコンピュータにいれ、自然言語、すなわち、日本語で検索することを目的としたものである。

私がこの数年、研究の中心としている地理情報システムの利用範囲はどんどん広がっていて、都市計画、森林管理、ガス管の配管管理などといった実務的な応用は進んできた。コンピュータメーカーや測量会社はこの分野に数百人のオーダーで人材投入をおこなっており、最近では大学にまでヘッドハンティングの手がのびており、ただでさえ少ない大学での研究者が減ってしまっただけでなく、また、困ったという複雑な心境である。だが、この成果のフィードバックが地理学に十分にされていないのが気がかりとなっている。もともと、地理情報システムの研究は地理学から始まったにもかかわらず、この分野では地理学者はマイノリティーになってしまった。環境問題にしろ、何にしろよく「地理学では昔からやっていた」という主張をするが、よその分野にとられてしまった後で言ってもゴマメの歯ぎしりでしかない。地理学の将来を考えたとき、地理情報を電子工学などの分野に明け渡してしまうのはしのびがたいものがある。さて、では地理情報の研究と地理学とをどう関連させてゆけばよいのだろう。

このためには、地理学研究者に地理情報処理に興味を持ってもらうことが必要である。このためにも、また、地理情報処理の新しい方法を考えるためにも地理学、特に地誌の研究に役立つような新しい概念に基づくシステムを作ることを計画した。幸いにも文部省の

補助金を得て一昨年から研究を始めることができた。どうやら概念がまとまり、メーカーの協力もあって技術的なメドもつきプロトタイプの試作にまでこぎつけた。

このシステムでは、大きな辞書を持ち、百科事典のように地域に関する情報をどんどん引き出せるというものである。例えば、「水害」といったキーワードから日本における水害分布図を数秒で描くなどということは朝飯まえのことである。また、「大塚」といったような地名をいれれば、その地図がでてくるといったことから始まり、要求に応じて人口、産業などのデータを様々な形で（グラフとか分布図で）表示したりする。それだけではない。道路のネットワークがデータモデルとして入っているので「春日から若荷谷まで」という指定をすると最適な経路を示すことができる。これではまだ芸がないので、数百メートルごとに写真を入れておけば、まるで映画のように風景の移り変わりを見ることができる。百聞は一見にしかず、という諺があるが、これをコンピュータで実現しようというわけだ。さらに、昔の地図や写真をいれておけば、明治の街を歩いた気分にもなれる。こういうシステムができれば、地誌学研究だけでなく、地理学教育や市民教育にも役立つであろう。

さて、ここでお願いなのですがこのプロトタイプに入れる写真、東京の、特に文京区の街頭の写真を捜しています。昭和50年以前の写真を必要としています。お手もたに写真がございましたらご提供ください。カラーでも白黒でも結構です。